

「男、突っ走る！」

第91回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (24)

『オフィスツリーイン』代表

本 部 明 美 (23)

元名古屋カフェ調理専門学校学生

国 枝 佐代子 (59)

『スリジエネ』総合プロデューサー

阿 川 武 久 (38)

振付師

住 橋 吉 岡 真由美 (42)

舞台俳優  
ダンス講師

野 倉 浩 平 太 (22)

『スリジエネ』メンバー

藤 田 昇 海 (19)

『スリジエネ』メンバー

山 森 茜 央 (17)

『スリジエネ』メンバー

大 坂 美 奈 (18)

『スリジエネ』メンバー

熊 瀬 怜 奈 (22)

『スリジエネ』メンバー

河 辺 真 理 恵 (30)

『スリジエネ』メンバー

阿 川 緑 花 (20)

『スリジエネ』メンバー

麦 川 愛 梨 (20)

『スリジエネ』メンバー

坂 本 寿 梨 (20)

『スリジエネ』メンバー

野 倉 浩 平 太 (22)

『スリジエネ』メンバー

藤 田 昇 海 (19)

『スリジエネ』メンバー

山 森 茜 央 (17)

『スリジエネ』メンバー

大 坂 美 奈 (18)

『スリジエネ』メンバー

熊 瀬 怜 奈 (22)

『スリジエネ』メンバー

河 辺 真 理 恵 (30)

『スリジエネ』メンバー

阿 川 緑 花 (20)

『スリジエネ』メンバー

麦 川 愛 梨 (20)

『スリジエネ』メンバー

1 木内家・全景

2 同・居間

雅也がテレビを見ている。

N「二〇一九年四月という新年度を迎え、

『スリジェネ』では、国枝さんが再び代表  
権限を持った総合プロデューサーとして仕  
切るようになり、僕は運営専任となったた  
め、毎週日曜日の稽古にも顔を出さず、平  
日に開催される運営会議への出席にとどま  
りました。マイキーが演劇祭の公演を最後  
にグループを去り、その代わりにこの春無  
事に国家資格に合格して晴れて歯科衛生士  
になったマリエや、高校三年生になったレ  
イナ、そして演劇ワークショップに参加し  
ていたむぎが復帰しました」

3 南公民館・大会議室

浩太、昇平、直海、茜、美央、怜奈、  
真理恵、緑、愛花、寿梨、橋岡がダン

ス稽古をしている――手を叩いてリズムを刻んでいるダンス講師・住吉真由美（42）。

演出席で、その様子を見ている佐代子。

N 「今は、ちょうど一年前の夏に僕がデビューした公演と同じ夏祭りの補助金事業として開催されるミュージカルに向けての稽古をメンバーたちはしていました。本来であれば、地元在住の小説家、沖島友さんの作品を原作とした市民ミュージカルを、観光協会からの委託事業として夏祭りに合わせて開催する話がありましたが、演劇祭直後に開催された市議会議員選挙によって議会の顔ぶれが変わってしまったことで、この企画は頓挫してしまったのです。その代替として、急遽補助金事業に応募し、無事に採択が下りて、今回は初めて国枝さんの書下ろしのミュージカルの制作が決まりました。また今回は本格的なダンスをしようと、地元でダンス教室を主宰している住吉真由

美先生が振付として携わることになりました」

#### 4 コンビニ・駐車場

浩太、茜、直海、寿梨が菓子パンを食べている。

直海「今回、結構ダンスがキツイね」

浩太「そりゃ、真由美先生はダンス教室主宰してるプロのダンサーだからな」

茜「去年までが緩かったのがいかに分かるよね」

寿梨「絶対しばらく筋肉痛になりそう」

浩太「確かにね」

直海「ねえ、最近うちー元気してる？」

寿梨「そういえば最近見てないね」

茜「四月に国枝さんが代表権限を持った総合プロデューサーになって、うちーは運営専任スタッフになったでしょ。だから、運営会議には顔出してるよ」

寿梨「たまには、稽古場にも顔出したら良い

のに。みんなもいるし」

浩太「うちーの中では、未だに演劇祭のこ  
と引きずってるみたいだぞ」

直海「そうなの？」

浩太「確かに、何とか本番は終わることがで  
きたけど、ヤマさんだって精算会の時に言  
ってたように、何とか人前で見せることは  
できた作品であっても、結局は学芸会と同  
じレベルだって言ってたじゃないか。うち  
ーの中では、満足のいく結果を出せなか  
ったこと、気にしてるんだって」

直海「そこまで気にすることないのに。うち  
ーは、いろんなしがらみに挟まれながら  
も、よくやったと思うよ」

寿梨「私も思う。だって、初めての演出だっ  
たんでしょ。百パーセントは無理かもしれ  
ないけど、うちーがどんな思いで演劇祭  
の作品に向き合ってたのかは、一緒に稽古  
した私たちが一番よく分かってるのに」

茜「まあね。でもほら、うちーは責任感強

いから」

直海「別に今の作品だって、大した演出じゃないと思うけど」

茜「ナオ……」

直海「だって、これまでヤマさんやうちーに散々好き放題言ってきた国枝さんだよ。あそこまで言うってことは、国枝さんの演出は相当なものかって私だって期待してたのに、いざふたを開けたら大したことなかったもん」

寿梨「まあ、それは私も思うなあ」

浩太「元々国枝さんは、映像の人間だろ。だから、あの人もそこまで舞台としての表現や演出の仕方、そこまで分かってないと思うよ」

茜「確かに、私が持ってくる小道具のシーンも、私たちの演技よりも小道具のことばかり気にしてるわ」

浩太「映像のカット割りと同じで、これを見せたいのかっていうのが強すぎるんだよ。」

だから、舞台としての表現になってないんじゃないかな」

直海「なるほどね、それなら納得いく」

浩太「だろ」

直海「今回も七夕の物語だけど、私今回の織姫役、上手くできる自信ないわ」

浩太「マイキーがいなくなって、今回は俺が彦星役になったけどさ、俺もちょっと不安になってきた」

寿梨「私はミオと一緒に猫の役でしょ。出番がそんなに多くないけど、それを幸運って思った方が良くないかな」

茜「多分ね。まあ私も、今回も天帝様に仕える女官の役だけど、正直去年の方が楽しかったな」

浩太「やっぱり、俺たちの演出がちゃんとできるのはヤマさんだけなんだよ」

険しい顔で、一同ペットボトルのお茶を飲む。

5 南公民館・大会議室

佐代子と住吉が話している。

佐代子「住吉先生、どうですか？ あの子たちの出来は」

住吉「皆さん演劇をやったり、去年のミュージカルの経験があるので、基礎的な部分は問題ないと思います。ただ、強いて言うなら、もっとみんなリズムカルになってほしいですね。ダンスなので、もっと音楽に乗って踊ってほしいですよ。今だと、覚えてた振付を頑張って覚えて踊ってるだけで、上手く音楽と交わってない感じがするんですよ」

佐代子「そうですか。では、ぜひそういうところも、メンバーのみんなに教えてあげてください」

住吉「分かりました」

6 木内家・雅也の部屋（夜）

小説を読んでいる雅也——スマホに通

知が来て、画面を見る。

雅也「え……？」

7 名古屋駅・金時計前（数日後）

雅也が待っている——と、やってくる

人に気が付き、手を振る。

雅也「明美ちゃん！」

と、明美が走ってやってくる。

明美「先輩……！」

雅也「久しぶり」

明美「お久しぶりです！」

8 居酒屋（夜）

雅也と明美が飲んでいる。

雅也「びっくりしたよ。いきなり、愛知に帰りますなんてLINE来るんだもん」

明美「二年も東京で働いたんです。パンの製造なんて聞こえは良いですけど、ブラックも良いところで、パートさんが一気に三人も辞めて現場の手が回らなくなって、しば

らくは私一人でやってたんですよ。でも、さすがにそんな状態が続くと、精神的にもヤバいと思って、私が壊れる前に仕事辞めてきました」

雅也「じゃあ、こっちで新しい仕事見つけるの？」

明美「もう見つけました。名古屋の高級食パンを製造するところに」

雅也「またパンなの？」

明美「だって私、パティシエの学科でしたから」

雅也「ああ、そうか」

明美「先輩だって、文章の学科だったじゃないですか。だから今も、そういう仕事もして、舞台にも立ってるじゃないですか」

雅也「あれはもう運営専任になったの。二月に舞台の演出をやったんだけど、上手いかななくてね。しばらく舞台の現場に立つのはやめようと思って」

明美「そうなんですか」

雅也「舞台の演出があんなにも大変だとは思わなかった」

明美「もう演出はやらないんですか？」

雅也「うん。いくら金積まれても、二度と演出はやらない、っってもう決めたから」

明美「そんなに嫌だったんですね。確かに、前に会ったときより、ちよつと痩せた気がします」

雅也「でしょ。痩せたというよりも、こけたんだらうね」

明美「先輩でも、そんなことになっちゃうんですね。二年前まで学生だった時は、例えば忙しくてもそんなことなかったのに」

雅也「早いねえ。もう卒業から二年経っちゃったんだ」

明美「ゾツとしますよね。もうあれから二年も経ったんだなって」

雅也「俺、たまに思うもんね。もう一度、学生に戻りたいって」

明美「分かります」

雅也「あの時はさ、ちよつと大変なことでも、  
何とか頑張れるエネルギーがあつたのに、  
今はそれすらもなくなつちやつたもんね」

明美「やっぱり違うんですよ、学生と社会人  
じゃ」

雅也「それもあるか……」

明美「でも、先輩は舞台のほうをしながらも、  
自分の事務所だつてもう三年目でしょ。大  
したもんじゃないですか」

雅也「そうでもないよ。自転車操業とは言わ  
ないけど、固定費だつてあるし、利益のこ  
と考えたら、ちゃんと仕事取つてこなきや  
つて思うしね。営業だなんて大それたこと  
じゃないけど、未だに名刺配りまわつて  
るんだから」

明美「そういう行動力は、学生時代から変わ  
つてませんね」

雅也「動かないと、何も始まらないからね」  
明美「オープンキャンパスの学生スタッフや  
つてたとき、先輩いろいろやりましたも

んね。被り物したり、クリスマスイベントの司会やったり」

雅也「あったね、そんなこと。懐かしいわ」

明美「学生スタッフの、いわば目標でしたから、木内先輩は」

雅也「結局、東京で桜も紅葉も見に行けなかったね」

明美「本当ですよ。ちゃんと約束したのに」

雅也「ごめんなさい」

明美「でもあれですよ。東京では行けませんでしたが、私がこっちに帰ってきたってことは、こっちで行けるってことなんですからね」

雅也「あ、そっか」

明美「楽しみにしてます」

雅也「明美ちゃんがこっちに帰ってきたんだもの、わざわざ俺が東京に行くタイミングとかって予定合わせなくても、お互いの予定が合えばいつでも会えるわけだ」

明美「そういうことです。だから、学生の時

みたい、また桜も紅葉も見に行きましょ  
うよ。あと、ビアガーデンも」

雅也「（苦笑して）そうだね」

明美「あ、あとひまわり畑も行ってみたいで  
す」

雅也「ひまわり畑なんて、何年も行ってない  
なあ」

明美「だからこそ、行きましょう。これ、約  
束です」

雅也「はいはい」

明美「先輩、お酒足りてます？」

雅也「まだ余ってる」

明美「じゃあ、今から注文すれば、ちょうど  
良いぐらいですね」

と、タッチパネルで操作を始める。

雅也「飲ますね、相変わらず」

明美「私にとって先輩との飲み会は、先輩を  
潰すための会だと思ってます」

雅也「本当に、俺のこと先輩とってる？  
そもそも学科すら違うのに」

明美「大尊敬してますよ、先輩のこと」

雅也「嘘つけ」

明美「本当ですって。（とタッチパネルの注

文ボタンを押して）はい、注文完了です」

雅也「（タッチパネルを奪い）じゃあ、明美ちゃんにも飲んでもらう」

明美「どんとこいですよ」

雅也、ムツとしてタッチパネルの注文ボタンを押す。

## 9 南公民館・ロビー

雅也が入ってくる。

## 10 同・大会議室

雅也がドアを開けて入ってくる。

雅也「失礼します」

休憩をしている浩太、昇平、直海、茜、  
美央、怜奈、真理恵、愛花、寿梨が見  
迎えて、

一同「うっちーッ！」

雅也「久しぶり」

愛花「どうしたの？」

雅也「いや、しばらく稽古場に顔出してないでしょ。だから、たまには来いよってコウタととみーに言われてね」

怜奈「久しぶり、うちー」

真理恵「久しぶり」

雅也「レイナとは年末以来だし、マリエなんて最後に会ったのいつだろうね」

浩太「それぐらい空いてたってことだよ。もつと稽古場に遊びに来たら良いのに」

雅也「俺は運営専任でしょ。稽古場にいたって、みんなの邪魔になっちゃうと思うし」

美央「そんなことないよ」

直海「そうだよ。うちーだって、『スリジエネ』の人間なんだから」

昇平「稽古場にいるだけで、空気が和むんだから」

雅也「（苦笑して）まさかあ。演劇祭の時、散々重たい空気作っちゃった俺がいて、和

むわけないじゃん」

直海「それがね、そうでもないんだよ」

雅也「え？」

昇平「稽古、あんまり上手く行ってないんだ

よ」

雅也「そうなの？」

と、阿川、緑、橋岡がやってくる。

雅也「お疲れ様です」

橋岡「おお、うちーじゃないか」

雅也「演劇祭の時は、ご来場ありがとうございます

いました」

橋岡「頑張ったな。阿川さんやヤマさんから、

話は聞いてたよ」

雅也「いえいえ」

阿川「元気？　うちー」

雅也「その節は、本当にお世話になりました」

緑「すっかり、顔色良くなったね」

雅也「そうですか？」

緑「だって、演劇祭の時なんて、顔の血色悪

かったもん」

雅也「そんなに悪かったですか」

阿川「まあ、あの時はそうなっちゃうよね」

雅也「あの、今メンバーたちから聞いたんですけど、今回の作品もあまり上手く行っていないって聞いたんですけど」

橋岡「（苦笑して）まあ、国枝さんにとって  
も初めての演出だし、あの人は映画から来た人だから、どうしても表現の仕方が映像  
向きなんだろうな」

寿梨「（浩太に）コウタと同じこと言ってる」

浩太「だろ」

雅也「そうですか」

緑「私が今、立場上演助手ってことになっ  
てるけど、あまりそれらしい仕事してなく  
てね」

雅也「でも、演出助手がいないと、舞台は成  
り立たないじゃありませんか。僕だって、  
演出部の人たちにはどれだけお世話になっ  
たか」

緑「あれは、うちのーが私たちを信用して、

意見求めてくれてたから」

雅也「今回は、そういう感じじゃないんですか？」

阿川「僕も、いつも稽古場にいるわけじゃないんですけど、緑から話を聞いて思ったのは、言わばワンマンに近い感じなんだよね。自分の言うことや、演出としての表現方法が正しいと思ってるんだよ。だから、キャストのみんながどういう意見を言っても無駄で、国枝さんの言いなりに何となく動いてる状態なんだよ」

雅也「そうなんですか？」

浩太「うちーが一番よく分かってるじゃないか、国枝さんがワンマンだったこと」

雅也「え？ まあ……それはね……」

茜「だから私たちが、演じてる間に何か違和感があっても、国枝さんの中では答えが見つかってるらしくて、まあ言い方悪いけど、通りいっぺんの演技になっちゃって、面白みがないんだよね」

雅也「そっか……。演出のことは、俺なんて人のこと言えないから、俺から言えることはないんだけどさ……」

昇平「そういう面では、うちーのほうがマシだったよ」

愛花「マシとか言ってやるなよ、うちーだって一生懸命だったんだから」

雅也「（苦笑して）良いよ、むぎ」

昇平「うちーの演出はさ、うちーが初めてだったからってこともあって、比較的俺たちに委ねたり、意見を求めてたじゃん」

雅也「あれは、ただ自分の中の正解がなくて、それしか方法がなかったの」

昇平「それで良かったんだよ。ああでもないこうでもないって、やってくことに意味があるんだから。それをこうしてくれ、ああしてくれって一方的に言われたら、芝居だって面白みがなくなるだろ」

雅也「なるほどね」

と、談笑しながら佐代子と住吉が入っ

てくる。

佐代子「あら、うちー」

雅也「お疲れさまです」

佐代子「うちー、こちら今回ダンス指導を

してくれる住吉真由美先生」

住吉「住吉です」

雅也「『スリジエネ』の運営をしている木内  
と言います。よろしく願いします」

佐代子「（一同に）さあ、そろそろ稽古再開  
しますよ」

一同「はいッ（と準備を始める）」

N「僕自身、『スリジエネ』でのリスタート  
をしたと思っていました。今のメンバー  
たちの話を聞いて、まだまだ課題はあるの  
だと実感していました」

つづく